

デュマルシェイ著 計理學

J. Dumarchey — La Comptabilité moderne, 1924 Lyon. の紹介並に批評

その中心體系

(I) 靜態的見地より觀たる貸借對照表

(1) 勘定の觀念及び定義

(2) 貸借對照表

(3) 貸借對照表の質的靜態的研究

(4) 貸借對照表の量的研究

(II) 動態貸借對照表

(1) 勘定の動的法則

(2) 勘定の起源及び貸借對照表

(3) 生産企業に於ける勘定の職能の一般的研究

(4) 生産の勘定——商品勘定の分析的及び綜合的研究

(5) 支店の計理

(6) 記帳の分業

右の内容及び以下紹介するところに依て知らるゝ如く、この著作全體としての特色は次の諸點にあると思ふ。

- (1) その構造に於て舊套を脱せること
- (2) 勘定 (Compte) を非常に重大視せること
- (3) 數理的解説が重要な部分を占むること

一

この書に於ける彼の學說として最も重要なものは右の目次中(I)に屬する部分即ち靜態の見地より觀たる貸借對照表に於ける理論であるが、その内特に(3)貸借對照表の質的靜態的研究(主として貸借對照表の内容分析及び分類の研究)及び(4)貸借對照表の量的研究(主として貸借對照表評價論の研究)に屬する部分である。故に以下紹介批評も主としてこの(I)の部分に就てなすこととする。

(II)の部分即ち動態貸借對照表の研究は主として帳簿組織及びその記帳技術の説明であつて、計理學の基本理論としては特に重要なものではない。然し計理學體系の構成論上から觀れば、帳簿及びその記帳技術の理論がそ

の體系に於て占むべき眞の地位を明かせる點に於て彼の學説は極めて重要なる意義を有するものと思ふ。

彼が日記帳、仕譯帳及び元帳等の組織を以て貸借對照表の動態的部分と看做せること、及び商品勘定を以て生産勘定と名づけたること等は、從來計理學上餘り強調せられてゐない點であるが、極めて合理的な觀方である。

次にこの著全體の上から觀て、その根柢に於て承服し難く思はるゝ點は、從來の通説に於けるが如く彼も亦計理學の對象を以て計算となすことである。彼が貸借對照表の質的研究と言ひ又量的研究と言ふことも、吾々の眼から觀れば總て主として企業活動そのもの特殊なる研究を意味するものに外ならない。即ちそれは貸借對照表なる形式を通しての企業の研究であつて、決して貸借對照表そのものの形式の研究又は貸借對照表に表はれたる數字の單なる計算法の研究のみを意味するものではない。このことは彼がこの書中に説ける主要なる内容に徴しても明かであるが、しかも吾々と同様の立場を採らない理由は、矢張り現今の一般計理學者と等しく彼も亦從來の *Tenu de livres* の實用論に囚はれて、未だ十分に *Classique* の殻を脱し得ないためであらう。この點に於て彼自ら Gabriel Faure の貸借理論を以て *La pseudo-démonstration classique* と非難したると同様の非難が一部彼自らの學説にも亦あてはまるのではなからうか。

而して彼の如く貸借對照表の動態的研究の一部として記帳理論を説くことは計理學體系の上より言へば極めて合理的なる方法であるけれども、單なる記帳理論そのものは何等動的要素を含むものとは考へられない。記帳方法としては（その技術的改良がなされる場合を除き）一定の組織又は一定の約束を以て足る理であつて、彼の言

ぶ貸借對照表の動態的研究といふことも、決してかゝる記帳技術上の動態的研究を指すものではなく、それは一定の記帳組織の下に表示せらるゝところの事實即ち Actif 又は Passif 等に屬する事實の變動關係の動態的研究を意味せるものである。この點を明かにするために、彼が勘定の動的法則として説くところを參照すれば、

$$A = \text{Actif}, \quad P = \text{passif}, \quad Sp = \text{Situation nette passive}$$

$$Sa = \text{situation nette active}, \quad A + Sp = P + Sa$$

或期間に於ける A の増減を a 及び a', P の増減を p 及び p', S<sub>A</sub> の増減を S<sub>A</sub> 及び S<sub>A</sub>' S<sub>P</sub> の増減を S<sub>P</sub> 及び S<sub>P</sub>' にて示せば、

$$(A + a - a') + (Sp + s_p - s_p') = (P + p - p') + (Sa + s_A - s_A')$$

$$A - a' + Sp - s_p' + p' - P + s_A' - Sa = 0$$

$$+ a + s_p - p - s_A = 0$$

又これは次の如く示される。

$$A + Sp = P + Sa$$

$$A - P + Sa_p = 0$$

或期間に於ける變化は、

$$A_0 - P_0 + Sa_0 = 0$$

$$A_1 - P_1 + Sa_1 = 0$$

$$\begin{aligned}
 A_2 - P_2 + S_{2A} &= 0 \\
 A_3 - P_3 + S_{3A} &= 0 \\
 &\vdots \\
 A_n - P_n + S_{nA} &= 0
 \end{aligned}$$

而して一般的に言へば

$$\begin{aligned}
 A_0 + A_1 + A_2 + A_3 + \dots + A_n \\
 P_0 + P_1 + P_2 + P_3 + \dots + P_n \\
 S_0 + S_1 + S_2 + S_3 + \dots + S_n
 \end{aligned}$$

$\alpha$  及び  $\alpha'$  を Actif の右左の金額、 $\beta$  及び  $\beta'$  を Passif の左右の金額とすれば

$$(\alpha - \alpha') - (\beta - \beta') = (\alpha + \beta') - (\alpha' + \beta)$$

こゝに示された如き貸借対照表の變動關係は彼に據れば主として數字の變動關係と解せられてゐるけれども、吾々は數字のみならずその内容そのものに於ける變動關係をもこれが表示するものであると考へ、これ等の式は孰れも企業の活動關係そのものの表示を意味するものと解する。故に動態的貸借対照表は企業の動態的表示であつて、企業成績の表示を以てその主たる役目とするものと考へて好い。従てこの部分の主たる研究は損益計算論に屬すべきものと思ふが、彼は損益計算論に就ては、生産の勘定として商品勘定の説明をなす場合僅かにそれに觸れてゐるのに過ぎないことは、重大なる缺點である。

二

計理學の基礎理論として最も重要な勘定の觀念及び定義が今日に至る迄極めて曖昧、亂雜に放任せられたる結果その科學的研究の發達を妨げたることは疑ひなきところであつて、彼も本書に於てその嚴密なる定義を下さんことに苦心してゐる。彼は計理學に於ける勘定の定義が今猶ほ不完全に存することは、恰も生物學に於ける「種」(espèce)の定義及び經濟學に於ける價値の定義に就て見るところと全く同様であつて、その重要な點に於ても又その困難なる點に於ても孰れも相等しきものと考へてゐる。從來勘定の定義として示された主要なるものとして Deschamps, Batardon, Bournisien, Leautey 等の定義を擧げて、それ等總てのものが孰れも眞に勘定そのものの本質に觸れざる極めて不正確不完全なることを極力非難したる後彼自ら次の如き説明をなしてゐる。抑も計理學上の事實は經濟學に於ける財貨の共通性質たる價値であつて、これを通俗的に言へば、例へば二百フランの馬、一萬フランの財産、八百フランの負債等といふ時のこれ等のものの價値に外ならない。而してこれ等の價値は確定せる分量を以て考へられ、且つフランといふが如き一定の單位の數に依て嚴格に示すことの出来るものである。

吾々がかかる價値の單位の集合を考へる場合には、それを或何等か特定の *measures* の下に結合して考へることが普通である。換言すればその集合の中に抱含されてる價値の各單位の全部に適合し、且つそれ等の單位にのみ適

合すべき或匪有の見地に依てこれを考へてゐるのである。かゝる價値の單位の集合に依て造られた價値の單位の一個の分類(或は結合)を指して勘定(Compte)と呼ぶのである。

例へば私の財産は現在十萬フランである、といふことは畢竟一つの勘定を造ることであつて、この十萬フランの價値單位の總ては私の所有に屬するといふこと、即ち私の財産であるといふことの共通性を有するものであるし、又私に屬する總ての價値單位が、その外形の如何を問はず即ち現金も、商品も、又債權も總てこの集合の中に包含されてゐるのである。

又例へば私が Pierre は私に千フラン借金がある、といふときも、同じく一つの勘定を造るのであつて、この場合千フランの價値單位に共通の特性は Pierre に依て私に返済さるべきもの、といふ點であり、且つ Pierre が私に借りたる價値の總ての單位がこの集合に包含されてゐる。

又他方から言て、私の財産十萬フランが現金二萬フラン、家屋五萬フラン、商品二萬五千フラン、Paul に對する債權五千フランから成てる場合、これ等の價値單位總てに共通なる私の財産といふ見地から一つの勘定を造ることが出来ると同時に、又そこに包含されてるこれ等の價値單位を右の如き個々の小さき集合に共通なる特性に依て更に四つの小さき勘定に分つことも出来る。即ち私の財産といふ一つの勘定は又右の四つの勘定に分けられると同時に、逆にこれ等現金、家屋、商品及び債權といふ四つの勘定は、私の財産といふ單一の勘定に結合することも出来る。これが勘定の構成及び分離に關する基礎理論である。

故に右の如き勘定の意義及び分類をとる場合特に重要なことは次の二點である。

- (1)そこに集合されてる總ての價值單位に共通なる特性即ちその固有の見地
- (2)それ等價值單位の數即ちその大いさ

從て總ての勘定はその特定の見地を示すべき明瞭なる名稱と、その大いさを示すべき正確なる價值の單位數とを以て表示されるものであつて、例へば次の如き形ちを以て表はされる。

何某の財産 (1920年11月1日)

現金	1000 fr.	
商品	8000	
ビエールに對する債權	3000	
Etc., etc.		

右の如き勘定に於て、その固有の見地は必然的に不動なるものであつて、これを變更することは常に初め特定したる勘定に對して、それより廣き見地又はより狭き見地に依る他の勘定にこれを入れ代へることを意味する。然るにその價值單位量の大きさに就て言へば、これは固有の見地とは反對に常に時と共に異動する性質を有つものであつて、今日私が所有する現金の大いさが千フランであつても昨日は八百フランであることもあり又明日は千二百フランとなることもある。

故に或瞬間に於ける勘定ではなく、繼續的時間に於て考慮せられたる勘定を示すためには、何等か適當の工夫が必要であるが、これは次の如くして容易に解決することが出来る。

Aを一つの勘定の見地とし、その初めの瞬間即ち第零瞬間に於ける價值單位數を一萬フランと假定する。次に第一瞬間に二百フランの増加、第二瞬間に三百フランの増加、第三瞬間に六百フランの減少、第四瞬間に百フランの増加、第五瞬間に四百フランの減少、等が生じたと假定すれば、下の如く示されるであらう。

$$A \quad 10,000 + 200 + 300 - 600 + 100 - 400 \dots \dots$$

然しこれを右の如く横に書く代りに次の如く縦に書くことも出来る。

A

10,000	
+ 200	- 600
+ 300	- 400
+ 100	

かくして勘定は並列した縦の二つの欄に發達することとなり、その一つは最初の大いさ及びその増加に用ひられ、他の一つはその減少に用ひられる。右の表示に於て左側を増加的異動にあて、右側を減少的異動にあてるといふことは全く單なる任意の約束であつて、かくの如くなすことに依て正負の符號を除くことが出来る。

更に又各勘定の異動状態を後に至ても猶ほ明瞭に了解し得るためには、單にその異動の大いさのみならず、異

動の性質をも示すことが大切であるといふことから、それ等の數を示す欄の外に、その運動状態を説明するための欄が附加されることとなり、遂に次の如き形式をとることが通常となつた。即ちかくして勘定に左右の摘要欄及び金額欄が設けらるゝに至つた。

		現 金			
11月1日	號	金 20,000fr.	11月4日	ポールニ支拂フ	7,000fr.
同 2日	ビエールヨリ受取ル	3,000	同 6日	税金ヲ支拂フ	1,500
同 6日	現 金 賣	800			
同 8日	家賃ヲ受取ル	1,000			

右に依り知らるゝ如く、彼に據れば勘定とは、貨幣價値を有する各種の事物の價値の増減計算をなすための特殊なる形式であるか、又はかゝる事物を或人の所有する財産といふが如き特定の觀念の下に集合したる場合、それ等の事物の有する貨幣價値の總計に於ける價値の増減を計算するための特殊なる形式であると解せられる。故に今日吾々の思惟上に於て貨幣的價値の計算が考へらるゝ總ての事物又は關係の見地に立て、その價値の集合及び計算を考ふることが勘定構成の中心原理である。従て個々の勘定が成立するに就てはそれ等勘定相互間の連絡統一といふことは初めに於て何等計畫豫定されてるものではない。

かくの如く解せられたる勘定は單なる價値單位集合の一分類に外ならないのであるから、形成され得べき勘定

の種類及び個數は殆んど無限に考へられる。故にこれ等無數の勘定を一定の關係に結びつけるシステム、換言すればこれ等無數に生じ得べき勘定が相互に函数的關係を有するに至る如き一つのシステムが存在せないのであらうかといふことが當然次に考へらるゝ問題である。

### 三

若し右の如きシステムが既に述べたる個々の勘定に關する理論と共同の原理に依て造られ、且つそれが勘定相互の *coexistence* の關係及び勘定の *états successifs* の關係等を説明し得るならば、勘定のシステムとして最も完全なる統一が保たるゝ理である。かくの如き理論の下に、彼は上述したる或人に屬する價值單位の分類即ちその財産といふ見地に於て諸勘定の統一を企て、次の如き説明をなしてゐる。

或人に屬する價值單位の分類表を造る場合を假定し、先づ彼に屬する現金、動産、不動産等の形に於ける價值單位の集合に對して積極の勘定 (*Compte de l'Actif*) といふ名稱を與へ、次にこの人の他人に對する負債といふ形に於ける價值單位の集合を消極の勘定 (*Compte de son Passif*) と呼び、最後に消極に屬する價值單位の大いさと積極に屬する價值單位の大いさとを照合して、その差額を純狀態 (*Situation nette*) と名づける。ちすれば右の三ツの關係を次の如く想像することが出来る。

- (1) *Actif* > *Passif* ;      (2) *Actif* = *Passif* ;      (3) *Actif* < *Passif* ;

(1)  $A = P + S_A$  ;

(2)  $A = P$  ;

(3)  $A + S_P = P$ .

これ等(1)(2)(3)等の表示式を貸借対照表と稱する。故に貸借対照表は次の如く定義することが適當である。

「貸借対照表は或人の有する Actif Passif 及び Situation nette 等の間に存する關係の表示である。」

例へば

1921年1月1日に於ける貸借対照表

actif :	Passif :	Situation nette (active)
100,000 <sup>fr.</sup>	= 50,000	+ 50,000 <sup>fr.</sup>

これを便宜上次の如く書き直す。

1921年1月1日に於ける貸借対照表

actif	Passif	
100,000 <sup>fr.</sup>	50,000	
	Situation nette	50,000
100,000 <sup>fr.</sup>		100,000 <sup>fr.</sup>

而して上記三ヶの式は次の如き一ヶの式に依て示すことが出来る。

$A + S_P = P + S_A$

(1) 式  $S_P = 0$

(2) 式  $S_A = S_P$

(3) 式  $S_A = 0$ .

上述の如き説明を以て彼は勘定の coexistence の關係を明かにし、次にその cats successifs の關係は貸借對照表に於ける變動關係或は動的見地よりする貸借對照表に據て左の如き公式を以て説明してゐる。

$$(1) \quad A+S_p=P+S_A$$

$$(2) \quad (A+z-a)+(S_p+s_p-s'_p)=(P+p-p)+(S_A+s_A-s'_A)$$

$$a-d'+s_p-s'_p=p-p'+s_A-s'_A$$

$$(A) \quad a+s_p+p'+s'_A=d'+p+s_A+s'_p$$

$$(B) \quad A+a+p'+S_p+s_p+s'_A=P+p+d'+S_A+s_A+s'_p$$

これ等の等式は貸借對照表上如何なる變化を生ずることがあつても常に維持される。

右の説明に依て知らるゝ如く、彼は個々の勘定の成立に就ては何等の連絡、統一を要せざる如く考へ、これが貸借對照表に於て初めて統一せらるゝ如く説いてゐる。然し吾々は、計理學に於て勘定といふとき、それが全く個々獨立の無統一、無連絡なる事實であるとは決して信ぜられない。かゝる勘定は始めから一種の連絡、一種の統一に依て繋がれたものであつて、貸借對照表を俟て初めて統一づけらるゝものといふことは正當でない。若し初めからかゝる統一性なきものとするならば如何にして coexistence の關係に於て、貸借對照表の下に突然統一づけられるに至るのであらうか。若し貸借對照表の下に集合された多くの勘定の間に一つの統一が見出さるゝな

らば、それは勘定自らがかくの如き統一性を含有するからこそ生ずる事實である。このことは尠くとも計理學に於ける勘定に就ては疑ふべからざる事實である。かくの如く考ふるときは、無數の勘定があつて、それが貸借對照表に於て初めて統一せらるゝものと觀るよりも、初めから貸借對照表なる體系に統一さるべき、統一性ある勘定こそ計理學上の勘定であると觀る方が適當である。又かくの如く解してこそ初めて彼の言ふ如く貸借對照表の動的狀態として帳簿組織が考へられ得るであらう。故に吾々は彼とは逆に、貸借對照表を先づ説き、その下に統一された勘定を次に説明する方が一層合理的であると思ふ。

次に貸借對照表の構成に就て、或人の所有する價值單位即ちその財産といふ *netto*。又は見地の下に各種の勘定の集合、分類、及び統一を考へ、A, P, S, といふが如き分類をなせることは従來英米に於ける *net worth* 及び獨逸に於ける *Reinvermögen* の計算を以て貸借對照表の基礎理論となす學說とその根柢に於て全く同一であつて、吾々はこれを計理學の數學的解釋として排するものである。彼も隨處に説けるが如く、貸借對照表を以て企業の經濟狀態の表示であるとするならば何故にその構成理論に就ても亦これを企業理論そのものに求めないのであらうか。因襲の根強き力がこゝにも窺はれる。

#### 四

彼が貸借對照表の質的靜態的研究と稱する部分に就て次に紹介を試みたい。彼がここで質的と稱する意味を上

記の貸借對照表公式に依て示せば、

$$(1) A = P + S_A; \quad (2) A = P. \quad (3) A + S_B = P$$

なる三種の式に於て(1)より順次(3)に至る變化を質的に退歩するといひ、それと逆に(3)より順次(1)に變化することを質的に進歩するといふのである。

かゝる變化の順序としては上記(1)(2)(3)及び(3)(2)(1)の外更に(2)(1)(3)及び(2)(3)(1)等も考へられ、それに依て企業に於る變化の進歩及び退歩の各種狀況が表示せられる。

然し猶ほその上にA及びPの内容の異なるに從て企業の内狀も亦自然異なるべきであるから、それらのものの構成部分に就ての分析及び分類を示すことに依て更に明瞭に貸借對照表の質的狀態を明らかにすることが出来る。

例へば十萬フランの *Actif* を有する場合に於ても、それが現金の形に於てあるか又は原料の形に於てあるかに依て同様でないし、又同額の債權に就てもその期日の異なるに從つて等しくないのであるから、企業に屬する *Actif* 及び *Passif* の適當なる分析及び分類表示をなすことが質的研究上極めて大切であると説き貸借對照表項目に就てその換貨實現性の大小、難易に應じて分類表示を試みてゐる。

彼はかゝる質的研究の目的を以て上記三種の貸借對照表に就て更に次の如き *Centres* 及び *espèces* に分類を試みてゐる。

		<u>Premier genre</u>	
		Première espèce	
Actif	204,500	Passif	100,000
		Situation nette :	
		initiale	35,000
		acquise	9,500
			44,500
	<u>204,500</u>		<u>204,500</u>
Deuxième espèce			
Actif	204,500	Passif	169,500
		Situation nette initiale	
			35,000
	<u>204,500</u>		<u>201,500</u>

Troisième espèce

Actif	189,500	Passif	165,000
Situation nette acquise	10,500	Situation nette initiale	35,000
	200,000		200,000

Deuxième genre

Première espèce

Actif	177,000	Passif	177,000
Situation nette initiale	15,000	Situation nette acquise	15,000
	192,000		192,000

Deuxième espèce

Actif	178,000	Passif	178,000
-------	---------	--------	---------

Troisième espèce

Actif	177,000	Passif	177,000
Situation nette acquise	13,000	Situation nette initiale	13,000
	<u>190,000</u>		<u>190,000</u>

Troisième genre

Première espèce

Actif	177,000	Passif	197,000
Situation nette initiale	20,000		
	<u>197,000</u>		<u>197,000</u>

Deuxième espèce

Actif	177,000	Passif	184,000
Situation nette initiale	20,000	situation nette acquise	13,000
	<u>197,000</u>		<u>197,000</u>

Troisième espèce

Actif		Passif	
Situation nette :			
initiale	50,000		
acquise	12,000		
	62,000		
			216,500
			216,500

更に Situation nette potentielle をこれに加けて各 espèce を二々の variétés に分ける。こゝに Situation nette potentielle と彼が言ふのは、商品又は製造品の手許有高に就き、その仕入原價或は製造原價と、それ等商品の販賣見込價格、即ち彼に據る prix potentiel との差額を指すものであつて、彼の主張に従へば、貸借對照表面に於けるそれら商品手許有高の價格はその仕入原價或は製造原價を以てなすと同時に右の差額を以て Plus-value 又は Moins-value として一方の側に表はし、又他方の側に上記の Situation nette potentielle を掲出する方法を以て最も合理的なる表示と考へてゐる。これを一例に就て表示すれば次の如き形となる。

Actif		Passif	
Stock, prix de revient	10,000		
Plus-value	2,000		
			Bénéfice potentielle 2,000
			(situation nette potentielle)

(この *Prix potentiel* に就ては後に貸借對照表の量的研究を論ずる場合詳説される)。

かくの如くして彼は後に貸借對照表の分類を論じて次の如き種類を擧げてゐる(彼は貸借對照表の分類論を次の量的研究の部に於て説き、下に示す如き分類を施してゐるけれども、吾々はその説明を以て寧ろ質的研究の部に屬すべきものと考へてここに續けて説くこととした)。

三個の *genre*

- (1) *Situation nette totale passive*
- (2) *Situation nette totale nulle*
- (3) *Situation nette totale active*

各 *genre* に於ける三個の *espèces* (合計九個の *espèces*)

- (1) *Situation nette acquise passive*
- (2) *Situation nette acquise nulle*
- (3) *Situation nette acquise active*

各 *espèce* に於ける三個の *variétés* (合計二十七個の *variétés*)

- (1) *Situation nette potentielle passive*
- (2) *Situation nette potentielle nulle*

(3) Situation nette potentielle active

彼はこの研究を以て貸借対照表の靜態的研究の一部に加へてゐるけれども、吾々の考へではこれは動態的研究の一部に屬すべきもので、企業に於ける Situation nette の動的意義を正確に判斷するため必要なることと思ふ。換言すれば營利活動の経過及びその成果をこれに依て明かになすことを得べく、企業内容の動的説明として極めて大切なものである。

右の如き分類を更に企業内容觀察の便宜のため下の如き分け方に變へることが出来る。

第一カテゴリー 三個の Situations nettes 即ち Situation nette initiale; Situation nette acquise; Situation nettepentielle 等孰れも存在せぬもの

第二カテゴリー 右三個の内一個のみ存在するもの

第三カテゴリー 右三個の内二個が存在するもの

第四カテゴリー 右三個の總てが存在するもの

第一カテゴリー

$S_i$   $S_a$   $S_o$  孰れもなし。

Figure 1.	$\begin{Bmatrix} S_i \\ S_a \\ S_p \end{Bmatrix}$	»	第四カテゴリ	Figure 1.	$\begin{Bmatrix} S_i \\ S_a \end{Bmatrix}$	»	第三カテゴリ	Figure 1.	$S_i$	»	第二カテゴリ
” 2.	»	$\begin{Bmatrix} S_i \\ S_a \\ S_p \end{Bmatrix}$	”	” 2.	$\begin{Bmatrix} S_i \\ S_p \end{Bmatrix}$	»	”	” 2.	$S_a$	»	”
” 3.	$S_i$	$\begin{Bmatrix} S_a \\ S_p \end{Bmatrix}$	”	” 3.	$\begin{Bmatrix} S_a \\ S_p \end{Bmatrix}$	»	”	” 3.	$S_p$	»	”
” 4.	$S_a$	$\begin{Bmatrix} S_i \\ S_p \end{Bmatrix}$	”	” 4.	»	$\begin{Bmatrix} S_i \\ S_a \end{Bmatrix}$	”	” 4.	»	$S_i$	”
” 5.	$S_p$	$\begin{Bmatrix} S_i \\ S_a \end{Bmatrix}$	”	” 5.	»	$\begin{Bmatrix} S_i \\ S_p \end{Bmatrix}$	”	” 5.	»	$S_a$	”
” 6.	$\begin{Bmatrix} S_a \\ S_p \end{Bmatrix}$	$S_i$	”	” 6.	»	$\begin{Bmatrix} S_a \\ S_p \end{Bmatrix}$	”	” 6.	»	$S_p$	”
” 7.	$\begin{Bmatrix} S_i \\ S_p \end{Bmatrix}$	$S_a$	”	” 7.	$S_i$	$S_a$	”	” 7.	$S_i$	$S_p$	”
” 8.	$\begin{Bmatrix} S_i \\ S_a \end{Bmatrix}$	$S_p$	”	” 8.	$S_i$	$S_p$	”	” 8.	$S_i$	$S_p$	”
				” 9.	$S_a$	$S_p$	”	” 9.	$S_a$	$S_p$	”
				” 10.	$S_a$	$S_i$	”	” 10.	$S_a$	$S_i$	”
				” 11.	$S_p$	$S_i$	”	” 11.	$S_p$	$S_i$	”
				” 12.	$S_p$	$S_a$	”	” 12.	$S_p$	$S_a$	”

1+6+12+8=27 figures

更にこれ等 figures に就て數字を加へて考へれば下の如き各種の formes が想像出来る。

Première catégorie :

Figure unique..... » 2<sup>e</sup> genre, 2<sup>e</sup> espèce, 2<sup>e</sup> variété.

Deuxième catégorie :

Figure 1.....S<sub>1</sub> » 3<sup>e</sup> genre, 2<sup>e</sup> espèce, 2<sup>e</sup> variété.

” 2. S<sub>1a</sub> » 3<sup>e</sup> ” 3<sup>e</sup> ” 2<sup>e</sup> ”

” 3. S<sub>2</sub> » 3<sup>e</sup> ” 2<sup>e</sup> ” 3<sup>e</sup> ”

” 4. » S<sub>1</sub> 1<sup>re</sup> ” 2<sup>e</sup> ” 2<sup>e</sup> ”

” 5. » S<sub>1a</sub> 1<sup>er</sup> ” 1<sup>re</sup> ” 2<sup>e</sup> ”

” 6. » S<sub>2</sub> 1<sup>er</sup> ” 2<sup>e</sup> ” 1<sup>re</sup> ”

Troisième catégorie :

Figure 1..... $\left\{ \begin{matrix} S_i \\ S_a \end{matrix} \right\}$  ” 3<sup>e</sup> genre, 3<sup>e</sup> espèce, 2<sup>e</sup> variété.

” 2.  $\left\{ \begin{matrix} S_i \\ S_b \end{matrix} \right\}$  ” 3<sup>e</sup> ” 2<sup>e</sup> ” 3<sup>e</sup> ”

” 3. ....	$\left\{ \begin{matrix} S_a \\ S_b \end{matrix} \right\}$	»	$3^e$	”	$3^e$	”	$3^e$	”
” 4.	»	$\left\{ \begin{matrix} S_a \\ S_b \end{matrix} \right\}$	$1^{er}$	”	$1^{re}$	”	$2^e$	”
” 5.	»	$\left\{ \begin{matrix} S_a \\ S_b \end{matrix} \right\}$	$1^{er}$	”	$2^e$	”	$1^{re}$	”
” 6.	»	$\left\{ \begin{matrix} S_a \\ S_b \end{matrix} \right\}$	$1^{er}$	”	$1^{re}$	”	$1^{re}$	”
” 7.	$S_i$	$S_a$	$\left\{ \begin{matrix} siS_i > S_a \\ siS_i < S_a \\ siS_i = S_a \end{matrix} \right\}$	$3^e$ $1^{er}$ $2^e$	” ” ”	$1^{re}$ $1^{re}$ $1^{re}$	$2^e$ $2^e$ $2^e$	” ” ”
” 8.	$S_i$	$S_b$	$\left\{ \begin{matrix} siS_i > S_b \\ siS_i < S_b \\ siS_i = S_b \end{matrix} \right\}$	$3^e$ $1^{er}$ $2$	” ” ”	$2^e$ ” ”	$1^{re}$ $1^{re}$ $1^{re}$	” ” ”
” 9.	$S_a$	$S_b$	$\left\{ \begin{matrix} siS_a > S_b \\ siS_a < S_b \\ siS_a = S_b \end{matrix} \right\}$	$3^e$ $1^{er}$ $2^e$	” ” ”	$3^e$ ” ”	$1^{re}$ ” ”	” ” ”
” 10.	$S_a$	$S_i$	$\left\{ \begin{matrix} siS_a > S_i \\ siS_a < S_i \\ siS_a = S_i \end{matrix} \right\}$	$3^e$ $1^{er}$ $2^e$	” ” ”	$3^e$ $3^e$ $3^e$	$2^e$ $2^e$ $2^e$	” ” ”
” 11.	$S_b$	$S_i$	$\left\{ \begin{matrix} siS_b > S_i \\ siS_b < S_i \\ siS_b = S_i \end{matrix} \right\}$	$3^e$ $1^{er}$ $2^e$	” ” ”	$2^e$ $2^e$ $2^e$	$3^e$ $3^e$ $3^e$	” ” ”
” 12.	$S_b$	$S_a$	$\left\{ \begin{matrix} siS_b > S_a \\ siS_b < S_a \\ siS_b = S_a \end{matrix} \right\}$	$3^e$ $1^{er}$ $2^e$	” ” ”	$1^{re}$ $1^{re}$ $1^{re}$	$3^e$ $3^e$ $3^e$	” ” ”

Quatrième catégorie :

			3 <sup>e</sup> genre,	3 <sup>e</sup> espèce,	3 <sup>e</sup> variété.
Figure 1.	$\left\{ \begin{matrix} S_a \\ S_b \end{matrix} \right\}$	$\left. \vphantom{\left\{ \begin{matrix} S_a \\ S_b \end{matrix} \right\}} \right\}$			
" 2.	$\gg$	$\left\{ \begin{matrix} S_a \\ S_b \end{matrix} \right\}$	1 <sup>re</sup> "	1 <sup>re</sup> "	1 <sup>re</sup> "
" 3.	$S_i$	$\left\{ \begin{matrix} S_a \\ S_b \end{matrix} \right\}$	$\begin{matrix} SiS_i > S_a + S_b & 3^e \\ SiS_i < S_a + S_b & 1^{or} \\ SiS_i = S_a + S_b & 2^e \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1^{re} \\ " \\ 1^{re} \\ " \\ 1^{re} \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1^{re} \\ " \\ 1^{re} \\ " \\ 1^{re} \end{matrix}$
" 4.	$S_a$	$\left\{ \begin{matrix} S_i \\ S_b \end{matrix} \right\}$	$\begin{matrix} SiS_a > S_i + S_b & 3^e \\ SiS_a < S_i + S_b & 1^{or} \\ SiS_a = S_i + S_b & 2^e \end{matrix}$	$\begin{matrix} 3^e \\ " \\ 3^e \\ " \\ 3^e \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1^{re} \\ " \\ 1^{re} \\ " \\ 1^{re} \end{matrix}$
" 5.	$S_b$	$\left\{ \begin{matrix} S_a \\ S_i \end{matrix} \right\}$	$\begin{matrix} SiS_b > S_i + S_a & 3^e \\ SiS_b < S_i + S_a & 1^{or} \\ SiS_b = S_i + S_a & 2^e \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1^{re} \\ " \\ 1^{re} \\ " \\ 1^{re} \end{matrix}$	$\begin{matrix} 3^e \\ " \\ 3^e \\ " \\ 3^e \end{matrix}$
" 6.	$\left\{ \begin{matrix} S_a \\ S_b \end{matrix} \right\}$	$S_i$	$\begin{matrix} SiS_i > S_a + S_b & 1^{or} \\ SiS_i < S_a + S_b & 3^e \\ SiS_i = S_a + S_b & 2^e \end{matrix}$	$\begin{matrix} 3^e \\ " \\ 3^e \\ " \\ 3^e \end{matrix}$	$\begin{matrix} 3^e \\ " \\ 3^e \\ " \\ 3^e \end{matrix}$
" 7.	$\left\{ \begin{matrix} S_i \\ S_b \end{matrix} \right\}$	$S_a$	$\begin{matrix} SiS_a > S_i + S_b & 1^{or} \\ SiS_a < S_i + S_b & 3^e \\ SiS_a = S_i + S_b & 2^e \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1^{re} \\ " \\ 1^{re} \\ " \\ 1^{re} \end{matrix}$	$\begin{matrix} 3^e \\ " \\ 3^e \\ " \\ 3^e \end{matrix}$
" 8.	$\left\{ \begin{matrix} S_i \\ S_a \end{matrix} \right\}$	$S_b$	$\begin{matrix} SiS_b > S_i + S_a & 1^{or} \\ SiS_b < S_i + S_a & 3^e \\ SiS_b = S_i + S_a & 2^e \end{matrix}$	$\begin{matrix} 3^e \\ " \\ 3^e \\ " \\ 3^e \end{matrix}$	$\begin{matrix} 1^{re} \\ " \\ 1^{re} \\ " \\ 1^{re} \end{matrix}$

右に依り貸借對照表には五十一ヶの可能形式が存することが知られる。又これ等夥しき形式を更に次の如く表  
 示するときは一種のシムメトリーを示すことが觀られる。下表中符號 I II III IV 等は各カテゴリーの番號を  
 現はし、且つ IV<sub>1</sub>と記せるは第四カテゴリーに於ける第七の figure を示すこととする。

Première espèce				Deuxième espèce			Troisième espèce		
1 <sup>re</sup> variétés	2 <sup>e</sup> variétés	3 <sup>e</sup> variétés	1 <sup>re</sup> variétés	2 <sup>e</sup> variétés	3 <sup>e</sup> variétés	1 <sup>re</sup> variétés	2 <sup>e</sup> variétés	3 <sup>e</sup> variétés	
III <sub>5</sub> IV <sub>2</sub> IV <sub>8</sub>	II <sub>5</sub> II <sub>4</sub> IV <sub>7</sub>	III <sub>12</sub> IV <sub>5</sub> IV <sub>7</sub>	II <sub>8</sub> III <sub>5</sub> III <sub>8</sub>	II <sub>4</sub>	III <sub>11</sub>	III <sub>9</sub> IV <sub>4</sub> IV <sub>8</sub>	III <sub>10</sub>	IV <sub>6</sub>	
IV <sub>9</sub>	III <sub>7</sub>	III <sub>12</sub> IV <sub>5</sub> IV <sub>7</sub>	III <sub>8</sub>	I <sub>1</sub>	III <sub>11</sub>	III <sub>9</sub> IV <sub>4</sub> IV <sub>8</sub>	III <sub>10</sub>	IV <sub>6</sub>	
Troisième genre			Deuxième genre			Premier genre			
IV <sub>6</sub>	III <sub>7</sub>	III <sub>12</sub> IV <sub>5</sub> IV <sub>7</sub>	III <sub>8</sub>	I <sub>1</sub>	III <sub>11</sub> III <sub>12</sub> III <sub>13</sub> III <sub>11</sub>	III <sub>9</sub> IV <sub>4</sub> IV <sub>8</sub>	III <sub>10</sub> III <sub>11</sub> III <sub>10</sub>	III <sub>9</sub> IV <sub>1</sub> IV <sub>6</sub>	

通常企業の貸借対照表としては右の第四カテゴリーに屬するものが大多数であらうが、兎に角その變化の多様なること想像外であると言て好い。

次に最も重要な部分即ち貸借対照表の量的研究の紹介をなすべきであるが原稿締切期日切迫に就きこれを次號に譲ることとする。

(一五、三、三一)

高瀬 莊太郎